

現代情報社会における情報倫理の新たな方向性とその確立方法の研究

[2012・FW] 20921101 遊佐拓矢

1. 研究の背景と意義

情報技術の進化と情報技術に対する依存度の上昇は今後さらに進行するものと推測される。技術においてはその使い方(倫理)が非常に重要であるが、情報倫理においてはその議論が専門家や研究者の間に留まっている。また本研究は、これまで別個に議論されてきた理論と実践を切り離すことなく言及する点にあり、ここに研究の新規性がある。

個人がより情報技術を利用しつつ社会と接する機会が増加している現代情報社会ではそれに応じた新たな情報倫理が個人レベルで求められ、ここに本研究の意義がある。

2. 研究目的・方法

本研究の目的は、主に次の2点にあるといえる。

まず、これまでの情報倫理の在り方の整理である。これまで情報技術が社会の中でどういった位置づけにあり、情報倫理が人々の間でどう意識されていたのかを明確にすることで、新たな情報倫理像を築くための材料とする。

次に情報倫理の概念のみならず、その確立方法を検討することにある。専門家や研究者による議論の域から脱却し、全社会的に情報倫理を確立させていくためには実践への方策まで含めて検討することが必要と考えられる。

研究方法については、主に先行研究調査を中心に行った。この分野の理論的基盤が未確立なためアンケート調査や特定個人へのヒアリング調査は効果が薄いと考えられる。

3. 研究結果・考察

情報技術が与えた影響は内部作業の効率化から始まった。その後対外的な活動の支援、そして人々の情報による活動や交流を背景とした新たな活動空間の創出や社会そのものの形成とその役割を広げてきた。その中で情報倫理は専門家や組織のなかでの規範から個人が持つべき知識・マナーといった位置づけへと移ってきた。研究者の間でも情報倫理の概念から始まり、より具体的な枠組みの確立や実践へ向けた研究が多くなり、現在では情報モラル教育の在り方を探るものを中心となっている。

しかし、こうした理論的研究と情報教育をはじめとする実践の部分では一貫性が確保しきれていないのが実情である。現在の情報倫理は情報にまつわるトラブルを回避するための知識や禁則事項として行政や立法、教育といった諸組織・機関から与えられているだけとなっている。この

「べからず集」ともいえる固定化された知識では個人間の理解や知識が異なるために問題が発生する危険性があり、現代情報社会の変化に対応することは不可能である。

4. 結論

先の問題点を踏まえ、単に情報倫理を問題回避のためのものにとらえるのではなく、情報を活用し、社会の便益を最大化するためのものという正の方向へと概念を改めることが必要である。また固定化された知識として与えられる情報倫理ではなく各自が情報倫理の構築に参画すること、つまり個人の集合によって情報倫理を構築することが求められる。個人が自ら情報倫理基盤の形成に携わることで、個人に対する情報倫理の定着を図る。

また、これを確立させ最大限に機能する場として、社会に情報の公開と共有、そして協調を原則とし、ソーシャル・キャピタルの概念を応用する相互扶助体制の確立が望まれる。これは情報技術によって一度は失われたとされる地域を単位としたコミュニティを情報技術によって再構築することである。情報技術を通じた人々の信頼と協調によるつながりで形成された集団の手で情報倫理を構築し、全体で情報を最大限に活用するよう取り組むことで社会全体の便益を最大限にすることを目指す形をとる。こうして情報倫理と相互扶助体制が互いに作用しあいその質を高め合うことで、現代情報社会がよりあるべき姿に近づくといえる。

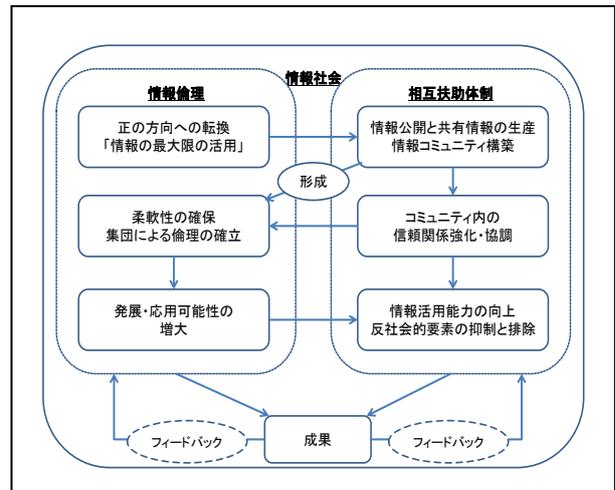


図 情報倫理と相互扶助体制の相互補完モデル